

1 宮崎県の旧石器研究の歴史

岩 永 哲 夫

(宮崎県埋蔵文化財センター)

はじめに

2001年の現在、宮崎県では旧石器時代遺跡の発掘調査が相次いで行われている。

西に九州山地を控え東に日向灘を望みながら宮崎県域を縦走する東九州自動車道建設に伴う発掘調査である。旧石器時代遺跡の多い県央部の国富町から西都市、佐土原町、新富町、高鍋町、川南町、都農町にかけた洪積台地上に立地している。かつて1970年代に大野寅夫氏が精力的に旧石器を採集し40か所近くにもものぼる遺跡を発見した地域である。

この地域の周到な調査によって宮崎県域の旧石器研究が良好な基礎資料を得、新しい段階を迎えることを期待しながらこれまでの宮崎県の旧石器研究をⅠ～Ⅲ期に分けてまとめたい。宮崎県の旧石器時代研究史については小野信彦氏（小野1989）、永友良典氏（永友1997）の論文を参照しながら新たな時期区分を行った。なお、上記論文で所在不明とされた日之影町新畑洞穴の資料は宮崎県総合博物館に所蔵されており、出土資料の尖頭器2点については縄文時代の所産の可能性が高いためここでは記述していない（第195図）。

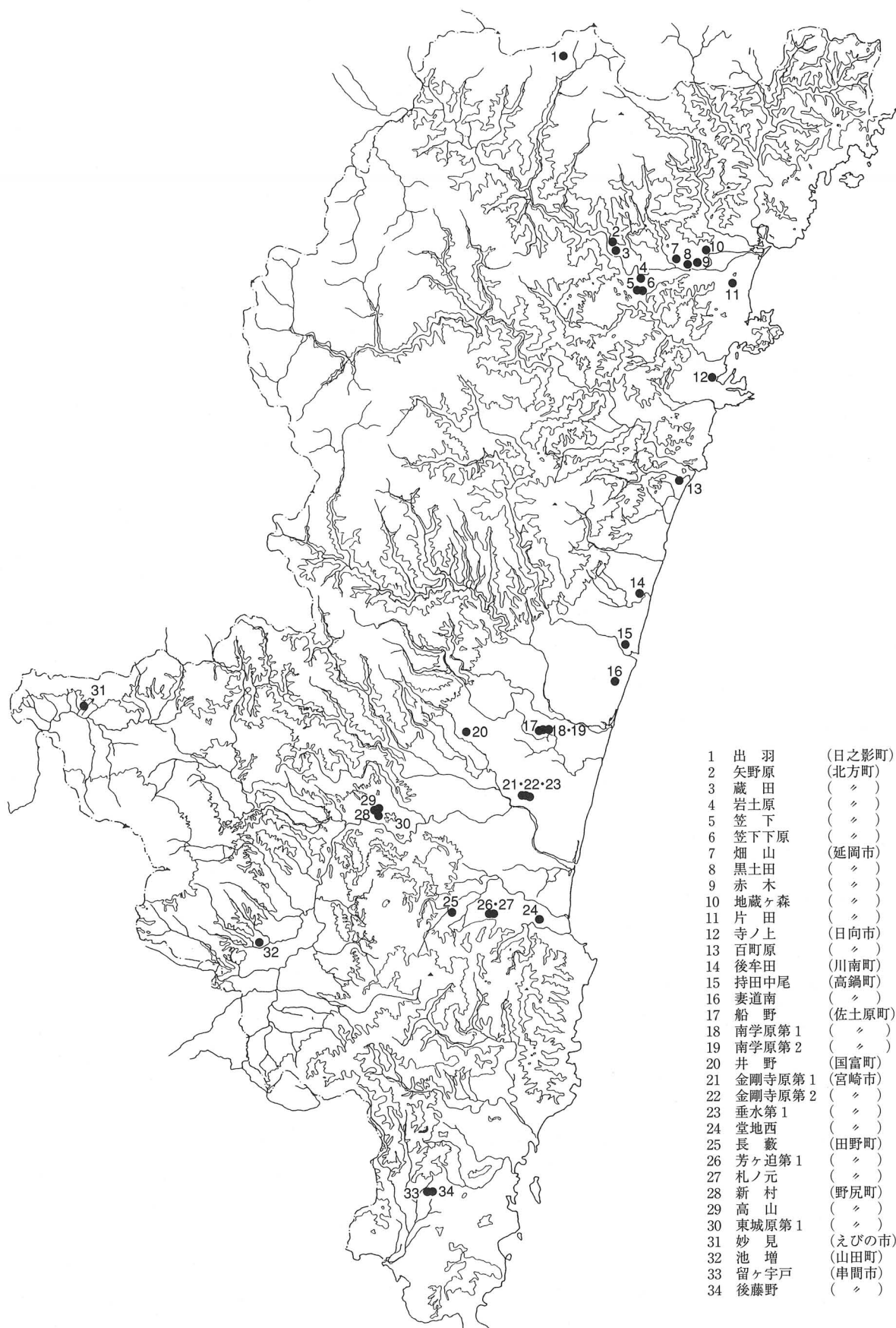
1 第Ⅰ期前夜；出羽洞穴以前（～1960年代前半）

旧石器の遺跡として層位的な調査はまだ行われていない時期である。

1936年、藤森栄一氏が九州を旅行された時、延岡市の有馬七蔵氏を訪ね、氏の蒐集資料の中に「洪積層の泥流下から獲られた旧石器のようなものを十数個～（略）～細石器のような刃器もたくさん」あるのを実見されている（藤森1978）。しかし、詳しい所見や実測図等がないため詳細は不明のままとなっている。有馬七蔵氏は古代遺物の収集家として知られ、自ら採集した石器・土器・玉類・鉄器類など数千点を所蔵されていたが、昭和20年の戦災で消失したといわれる（石川1968）。

1961年には宮崎大学の遠藤尚氏が宮崎平野部で旧石器を採集されている。田野町の宮崎大学演習林登り口の切り通し（萩ヶ瀬遺跡）から頁岩製ナイフ形石器、川南町国光原で砂岩製の縦長刃器、新富町宮ノ首で剥片を採集されている（鈴木1985）。

1957年、九州大学で開催された学会に松岡史氏が持参された佐賀県唐津市周辺採集のナイフ形石器等の石器を実見した鎌木義昌氏は、その重要性に驚き、以後、芹沢長介・高橋護・間壁忠彦氏らと松岡氏採集の石器の調査を行った。1959年には鎌木・芹沢の両氏は九州の旧石器時代遺跡の分布状況を



第195図 旧石器時代主要遺跡分布図

調査し、ほぼ全域に旧石器が分布していることを確認している。宮崎県内では宮崎市垂水公園遺跡の横剥ぎ剥片を利用した安山岩製のナイフ形石器、田野町黒草でもこれによく似た剥片が発見されていることからナイフ形石器の段階では瀬戸内的な様相を示す可能性を示唆している（鎌木・間壁1965）。

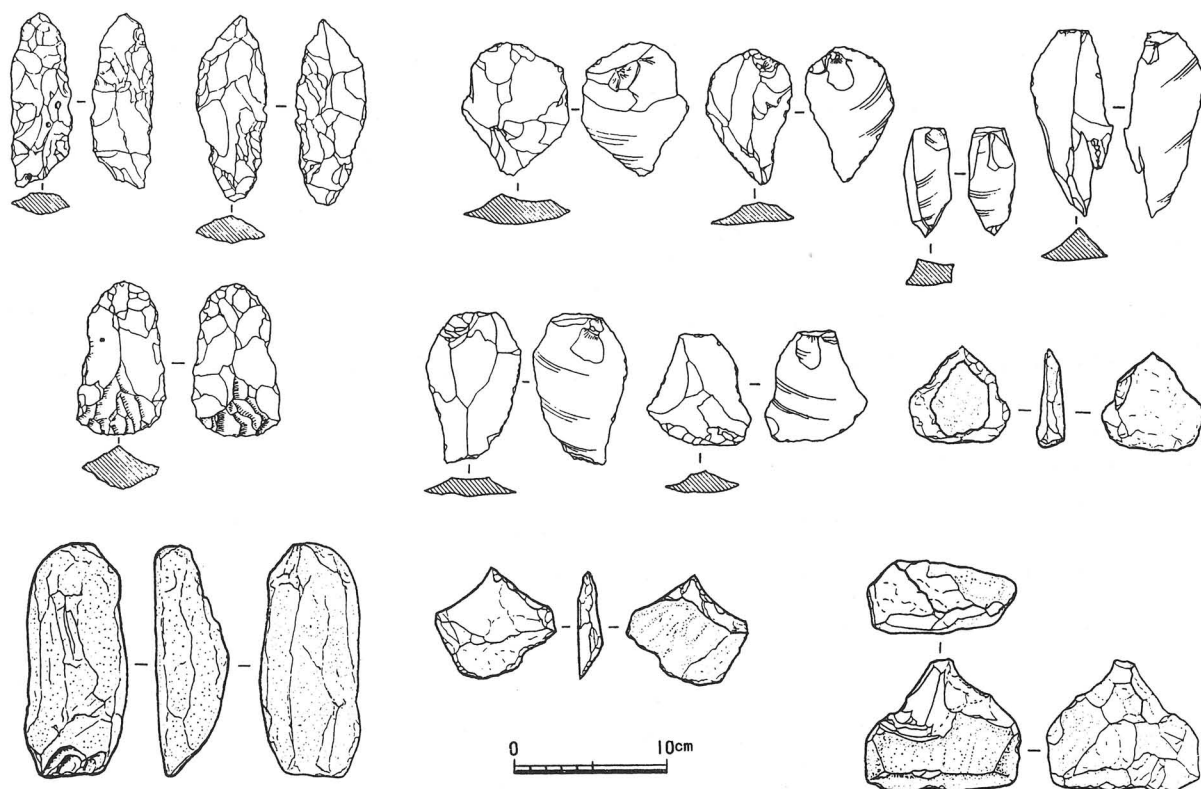
2 第Ⅰ期；出羽洞穴以後（1965～1980）

主に大学による調査の時期で、旧石器及び縄文時代の遺跡の調査が活発に行われている。旧石器時代では南九州短期大学鈴木重治氏による日之影町出羽洞穴、北方町菅原洞穴、岩土原遺跡、別府大学橋昌信氏による佐土原町船野遺跡の調査が行われた。これらの調査をもって宮崎県の旧石器時代の研究は開始されたといつてよい。

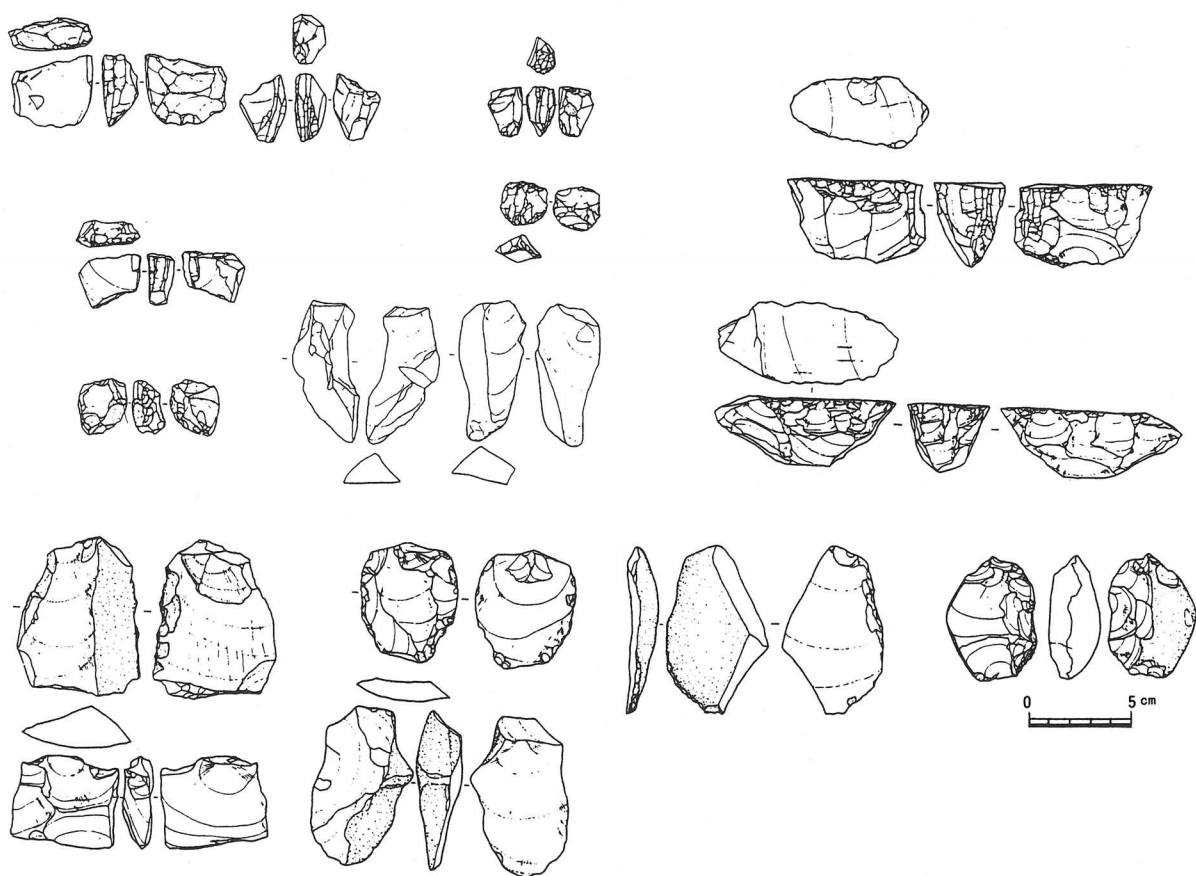
出羽洞穴は日之影町の本谷山の中腹、標高約920mの南斜面の日当たりの良い位置にあり、南面して1号洞穴、西側上部には2号洞穴、また東側には西面して岩陰がある。周辺には石材に適した流紋岩の礫がいたるところにみられる。五ヶ瀬川の上流域には洞穴や岩陰が集中しており、出羽洞穴の調査に先立って行われた分布調査では二十か所以上が発見されている。発掘調査は1965・1966年に南九州短期大学・宮崎高等学校の学生・生徒の参加の下、鈴木重治氏によって行われた（鈴木1989）。1号洞穴の調査の結果、第Ⅱ層（縄文）、第Ⅲ層（後期旧石器）、第Ⅷ層が主要な包含層であった。第Ⅲ層が旧石器の主な包含層で、尖頭器、削器、斧形石器、石核、剥片等が検出されている（第196図）。尖頭器は厚手の剥片を素材にして断面が不整形の菱形を呈していることなどから佐賀県の多久三年山や茶園原遺跡などの扁平で長手の尖頭器より古い時期の尖頭器の存在が指摘された。第Ⅷ層は石英粗面岩を素材にしたチョッパー、チョッピングツールや扁平な礫を素材とした尖頭状礫器、敲打器が出土している。出羽洞穴は宮崎県内で初めて発掘調査された旧石器時代の遺跡で、第Ⅲ層の後期旧石器の組成とともに第Ⅷ層から前期旧石器を考えさせる石器が出土した遺跡として注目を集めることとなった。しかし、前期旧石器問題については不明な点も多く、明確な結論を得ていない。また、出羽洞穴調査の一環として1966年に北方町菅原洞穴の発掘調査も行われ、後期旧石器が確認されている（鈴木1985）。

岩土原遺跡は五ヶ瀬川中流域の右岸に形成された標高約120mの段丘上にある。調査は1968年、鈴木重治氏によって行われた（鈴木1973・1989）。三つの文化層からなり、第一文化層は縄文時代早期の押型文土器の時期、第二文化層は後期旧石器時代の細石器文化から縄文時代草創期の時期、第三文化層は細石器文化に先行する時期である。特に注目されるのは第二文化層で、隆帯上に爪形文を施した土器口縁部の出土である。一点の出土であるが、土器起源の問題を究明する上でも貴重な発見であった。石器は細石核・細石刃が主体をなし、拇指状搔器、石核搔器、舟底形石核、半舟底形石核、剥片などが出土している。第三文化層は縦長剥片を素材とした不整形搔器が多く、出羽洞穴の第Ⅲ層の資料の一部や菅原洞穴の第Ⅱ層の資料と共通性があり、同時期に位置づけられる（第197図）。

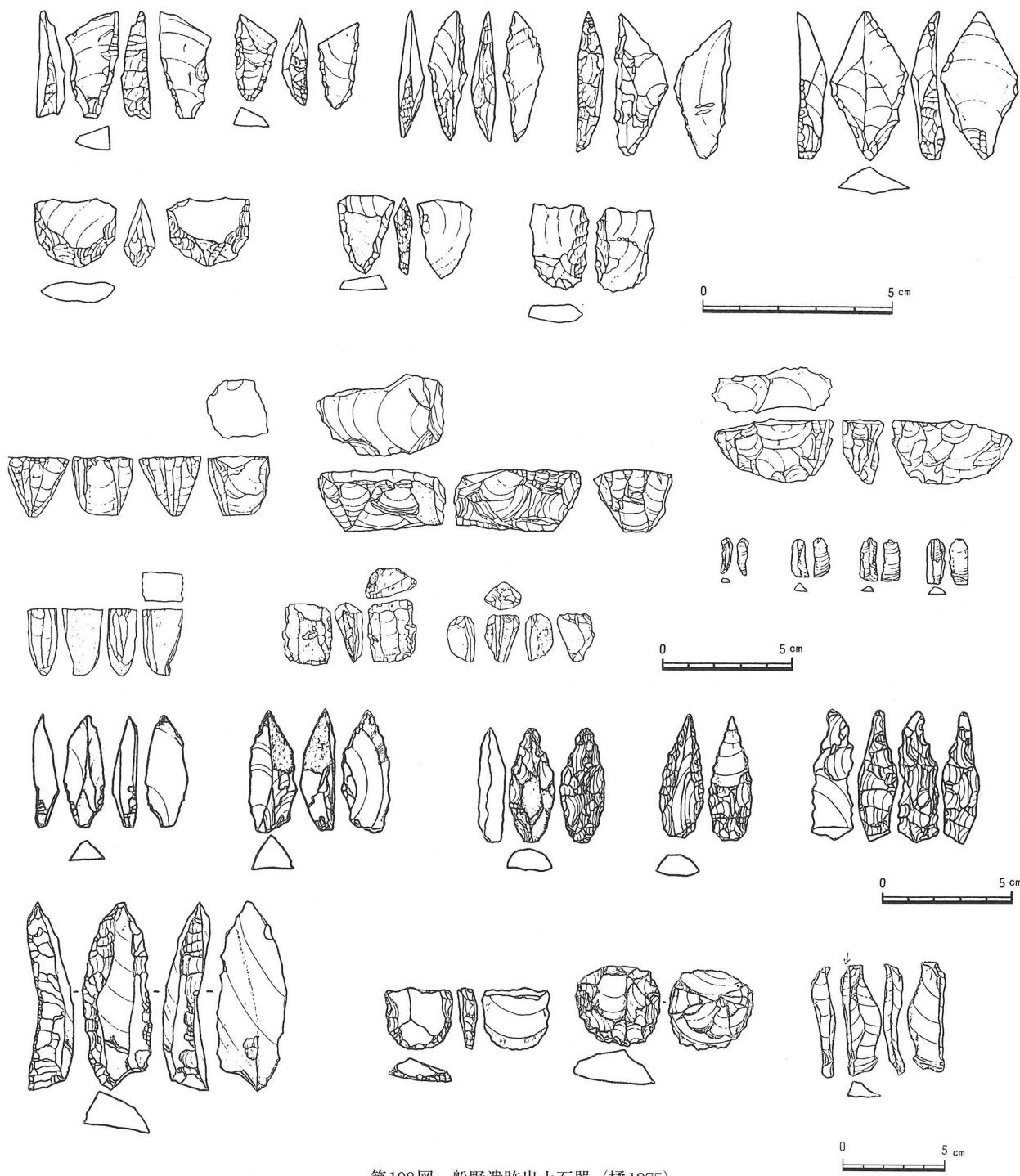
船野遺跡は宮崎平野部中央を東流する一ツ瀬川右岸にあり、小河川による開析谷が入り込んだ標高



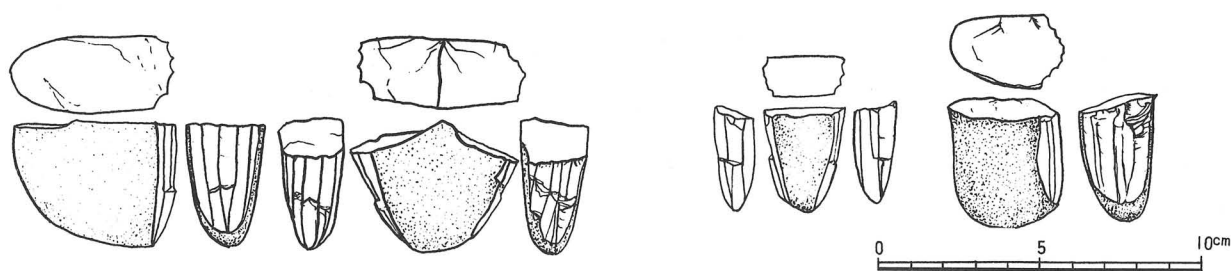
第196図 出羽洞穴出土石器 (鈴木1989)



第197図 岩土原遺跡出土石器 (鈴木1989)



第198図 船野遺跡出土石器 (橘1975)



第199図 大野寅夫氏採集石器 (茂山1980)

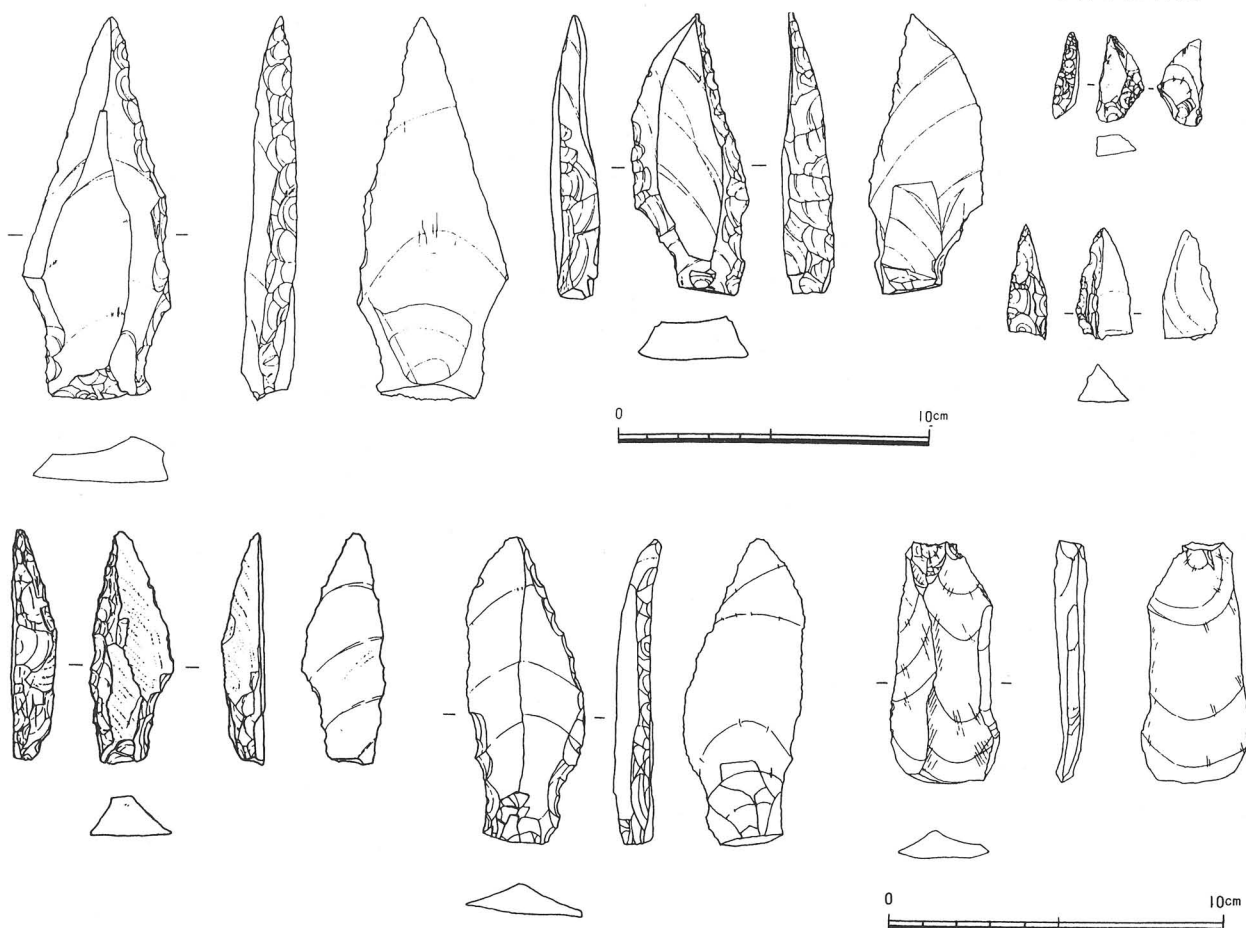
約80mほどの台地上に位置している。遺跡は1970年地元出身の別府大学生の表面採集によって発見されたもので、1970・1971・1972年に橘昌信氏が二地点において発掘調査を行っている（橘1975）。発掘調査では第Ⅱ層アカホヤ層下の第Ⅲ層粘質暗褐色ローム層から後期旧石器時代の遺物、ナイフ形石器、細石器、台形様石器、尖頭器、スクレイパー、彫器、石核などが出土している。文化層は三枚確認され、小型のナイフ形石器とスクレイパーに細石器を伴わない第一文化層、ナイフ形石器、台形様石器、尖頭器に黒曜石や流紋岩製の細石器が伴う第二文化層、小型のナイフ形石器と細石器と一緒に出土する第三文化層である。層位の不明瞭な状況もみられることからナイフ形石器主体の地層と細石器主体の地層に分かれるのではないかと指摘もあるが、今後の調査の進展に伴って検証され解決される問題であろう。船野遺跡出土の細石核はこれまで九州では類例のなかった特徴的な製作技法によって作り出されたもので「船野型細石核」と呼ばれている。現在、東九州一帯に分布がみられるものである。このように船野遺跡はナイフ形石器文化から細石器文化への移行期の状況を示す遺跡として重要である（第198図）。

さらにこの時期、児湯郡を中心にした大野寅夫氏の精力的な石器採集活動がある（茂山・大野1977、茂山1980）。児湯郡一帯は農業構造改善事業などの大型開発が進行していたが、大野氏はこのような開発事業による掘削面等から主に旧石器の採集を続け、採集地は11市町38か所にものぼっている。市町村別にみると、西都市10、新富町10、高鍋町3、木城町2、川南町5、都農町1、佐土原町1、国富町3、高岡町1、田野町1、東郷町1である。石器は「いずれも新期日向ローム層の3層（小白斑ローム層）から4層（褐色ローム層）面まで削平された段丘面で採集され」ており、5層のAT火山灰層上位からの出土ということになる。ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、石核、細石核、細石刃、礫器、剥片等200点以上採集されている（第199図）が、特に注目されたのは細石核で「砂岩の扁平な小円礫に、側面から打撃を加えて剥離した半円形の側面観をもつ礫を母型とする、側面調整や打面調整を加えることなく、最初の打撃によって作出された平坦な截断面をそのまま打面にして、短辺の片側あるいは両側から細石刃を剥離している。（略）細石刃の製作技法としてきわめて原始的ともいえる本例のような細石核を畦原型と仮称しておきたい」と提起されたように新たな技法として認識され、今日、畦原型細石核として定着している。この技法による石核は船野遺跡出土資料中にもみられる。また、鹿児島県加治屋園遺跡では扁平な安山岩の一端から細石刃を剥離しており、南九州を含めた九州東南部地方を中心に分布している。その後、国富町井野遺跡の調査において小規模な発掘ながら層位的に砂岩製5点、凝灰質頁岩1点が出土している（岩永1991）。

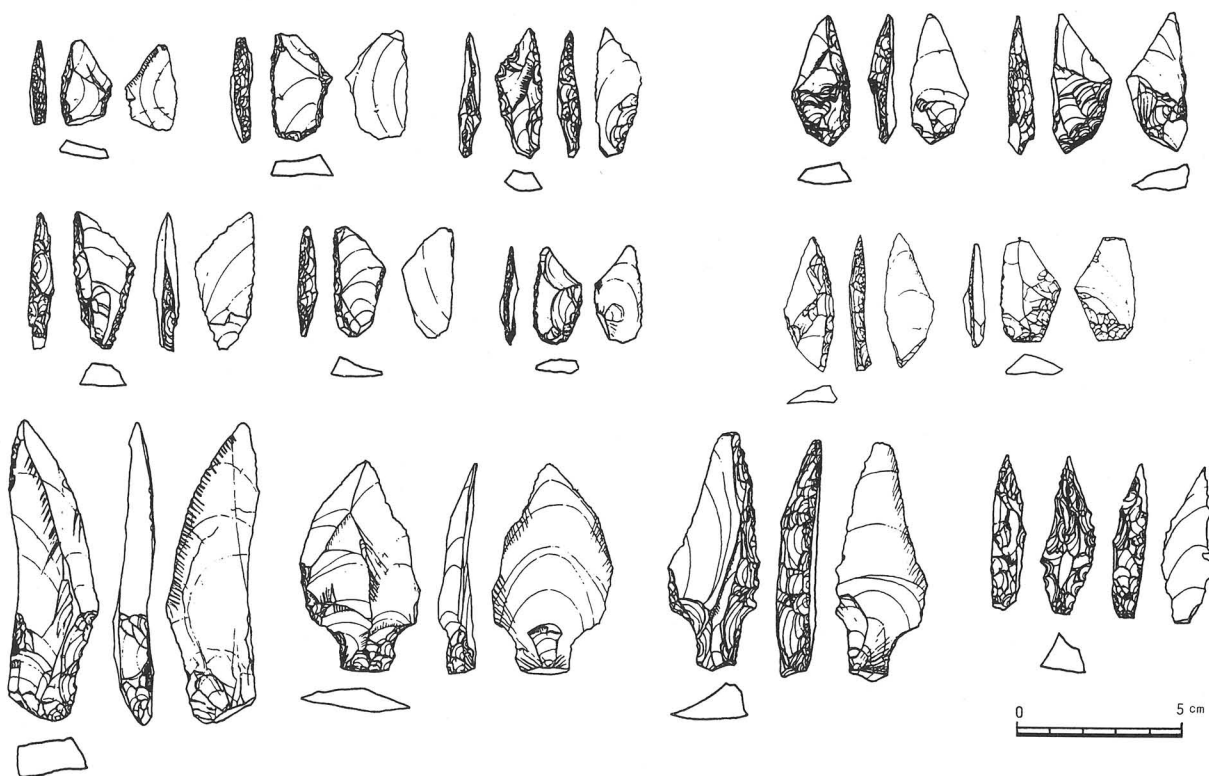
以上のように、第Ⅰ期の調査は空白状態であった本県地方の旧石器時代の様相を明らかにした点で極めて重要な学史的意義を持つものであり、第Ⅱ期の展開を前に特筆されるものである。

3 第Ⅱ期；宮崎学園都市遺跡群以後（1980～1990年代前半）

各種開発事業の進展に伴って行政需要が増し、県教育委員会をはじめ市町村教育委員会に埋蔵文化



第200图 堂地西遺跡出土石器 (永友1985)



第201图 赤木遺跡第一文化層出土石器 (永友1987)

財担当専門職員が配置され、行政機関による発掘調査が殆どを占めるようになった時期である。

宮崎平野のやや南に当たる清武川と加江田川に挟まれた宮崎市熊野から清武町木原にかけての台地上に宮崎学園都市建設が計画され、1980年から県教育委員会による遺跡群の発掘調査が始まった。約300ヘクタールの建設予定地内に約30ヘクタールの遺跡群が所在する広大な遺跡群であった。この学園都市遺跡群の発掘調査は火山灰の分析、熱ルミネッセンス法等による各種年代測定法など自然科学的分析を可能な限り導入するようになったことや調査の質的向上を図るために各分野の専門家を招聘し指導を受ける体制が整ったことなど行政機関による発掘調査の大きな転換点となった。

学園都市遺跡群の一つ、宮崎市堂地西遺跡は台地西端の標高約50mの遺跡群では最高所に位置している。1984年の発掘調査ではA Tの堆積層が確認され、直上層から集石遺構6基と剥片尖頭器やナイフ形石器を中心とする石器群が検出された(永友1985)(第200図)。この調査は旧石器では県内で初めての面的な調査であったこと、A T層が科学的に確認されたこと、層位的な遺構の検出等により集落の様相をとらえる資料が得られたことなど画期的な調査であった。

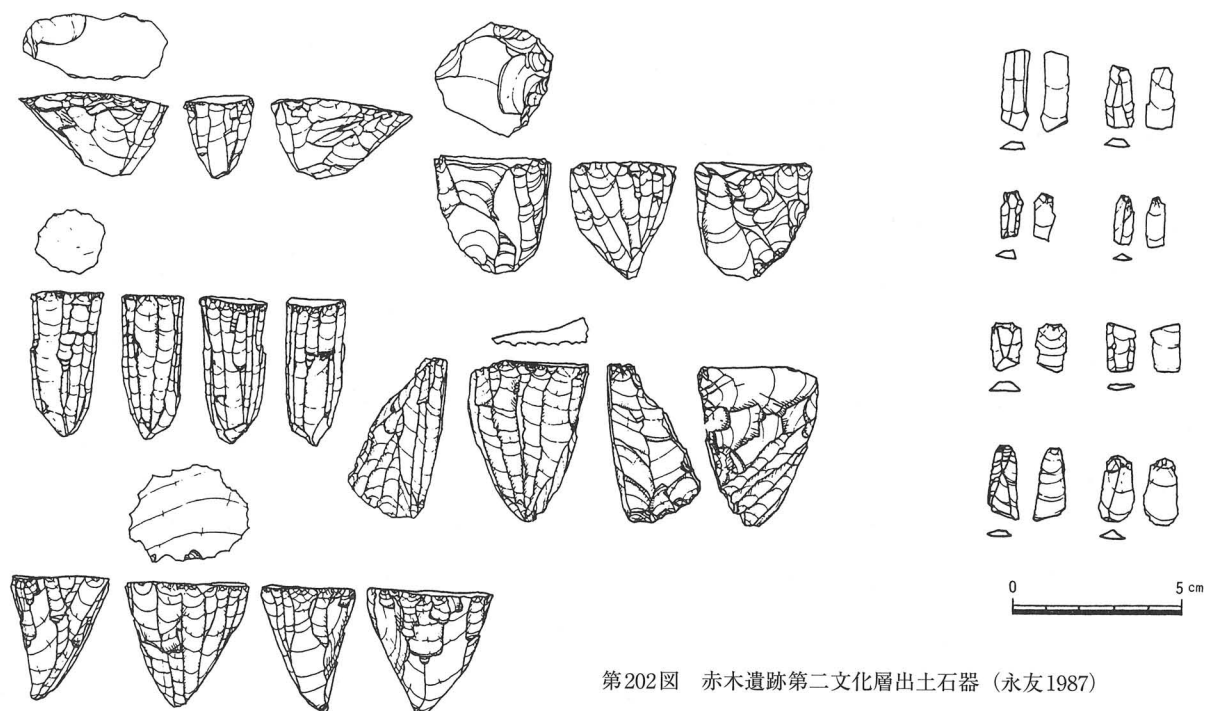
以後、県内各地において本格的に旧石器時代の調査が行われるようになった。

県北地域の旧石器時代の代表的な遺跡となった延岡市赤木遺跡が1985年に発掘調査が行われ、二つの文化層が確認された(永友1987)。遺跡は五ヶ瀬川下流域左岸にあり、行膝川に沿って延びる丘陵の北側平坦地に所在する。調査ではA T層が確認され、直上層から切り出し型のナイフ形石器を中心とした石器群(第一文化層)、さらにその上層から細石器群(第二文化層)が検出された。ともに多量の焼礫が出土していることから当時の生活面と考えられ、文化層が明確に分かれることが確認できたことは大きな成果であった。第一文化層からは配石遺構1基とともにナイフ形石器36点、剥片尖頭器3点、三稜尖頭器6点のほか多量の石核、剥片、チップが出土している(第201図)。第二文化層からは細石核5点、細石刃24点が出土している(第202図)。第一文化層は船野第二文化層に先行し堂地西と同時期若しくはやや後出の時期、第二文化層は船野第三文化層と同時期かやや後出の時期、土器と細石核が共伴する岩土原第二文化層に先行する時期と考えられている。

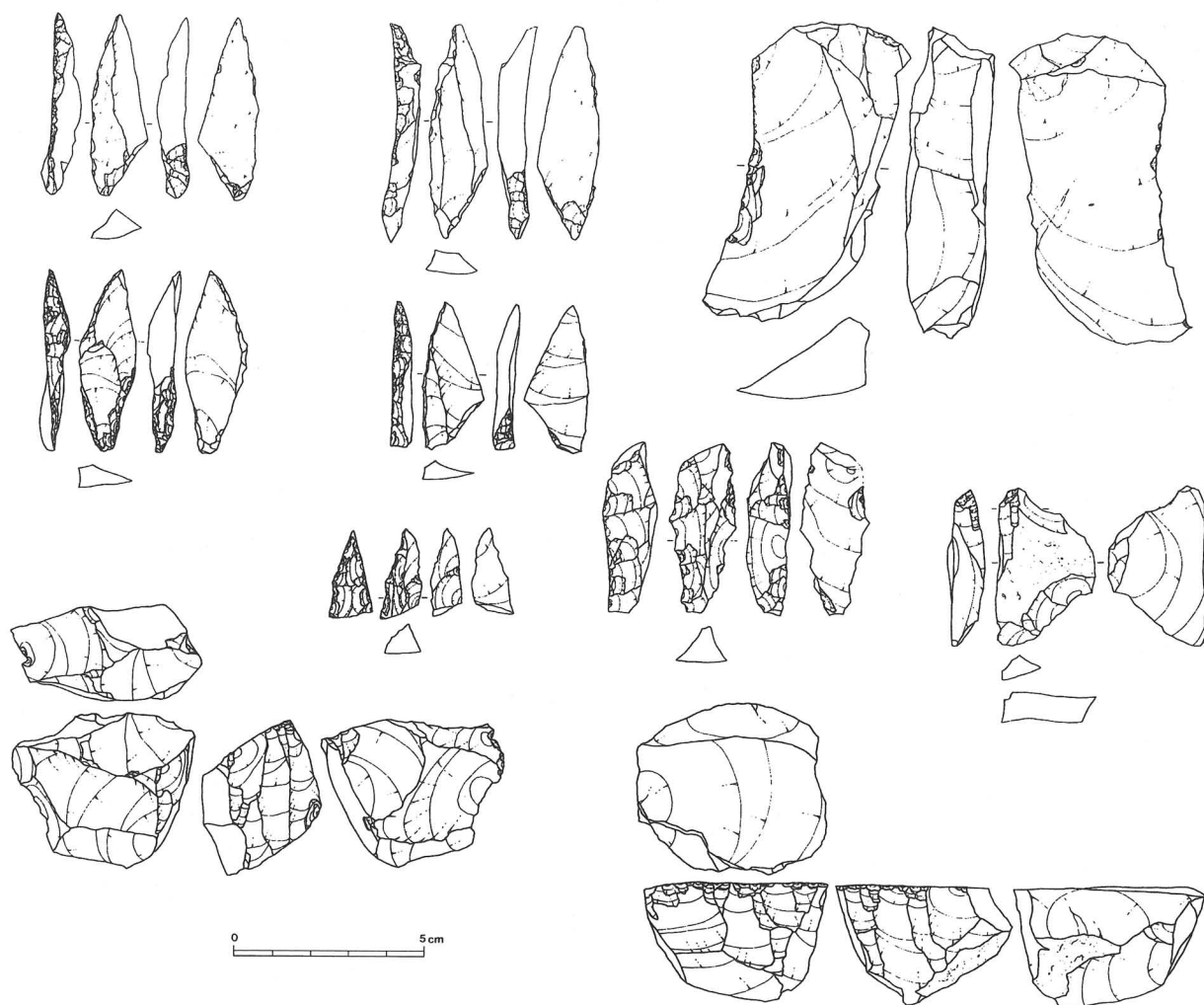
1989年から1990年にかけて延岡市片田遺跡が調査され、A T層上位の第Ⅲ層から礫群や遺物集中区が検出され、1000点にものぼる石器が出土している(山田・高松1990)。石器はナイフ形石器、スクレイパー、角錐状石器、二次加工剥片、使用痕剥片、細石刃、細石核、彫器、石錐、打製石斧、抉入石器などで複数の時期が考えられる。石材は殆ど流紋岩、ホルンフェルスであり、チャート、黒曜石、安山岩が僅かにある(第203図)。

また、1991年に行われた延岡市畑山遺跡ではA T層の下位から剥片、チップ類、上位から剥片尖頭器、剥片が出土している(谷口1992)。

1992年には北方町矢野原遺跡が調査され、A T層の下層と上層に二つの文化層が確認された(谷口1995)。矢野原遺跡は標高約122mの阿蘇溶結凝灰岩の台地上に所在している。旧石器時代の遺物包含層は第Ⅶ層A T層の下層第Ⅷ層下面及び第Ⅸ層上面の第Ⅰ文化層とA T層の上層第Ⅵ層の第Ⅱ文化層



第202図 赤木遺跡第二文化層出土石器 (永友1987)



第203図 片田遺跡出土石器 (山田・高松1990)

である。この遺跡では第Ⅷ層のb層とc層間の埋土の年代測定を行い、 $24,290 \pm 680$ (22,340 B.C)の数値を得ている。AT下の第Ⅰ文化層では数点のスクレイパー類と石核、剥片類が少量出土しているに過ぎないが、第Ⅱ文化層からは礫群とともに約3,000点の石器類が検出されている。石器はナイフ形石器43点、剥片尖頭器19点、三稜尖頭器13点、両側辺加工の尖頭器2点、搔器16点、削器24点、錐1点、不定形石器49点、石核56点、剥片類2,400点、磨石11点、敲石6点、台石6点など多量である。石材は流紋岩が大半で、安山岩、チャート、砂岩が少量使用されている。接合例は95例あり、多くは同じグリッド或いは周辺のグリッドとの資料であり、それぞれの箇所でのまとまりを示している。この遺跡では調査の迅速化を図るためコンピュータ・システムを導入し、遺物の取り上げを行っている。

1988年に調査された日向市百町原遺跡ではAT直上の第Ⅴ層褐色ローム層から礫群とともに縦長剥片を素材とするナイフ形石器、スクレイパー等が出土している。日向地区では初めての発掘調査であり、県北部の五ヶ瀬川流域と宮崎平野部の間の地域を埋める貴重な調査であった。

このほか、県北部では北方町蔵田遺跡、笠下遺跡、笠下下原遺跡、延岡市地藏ヶ森遺跡、黒土田遺跡、日向市寺ノ上遺跡等から旧石器が出土している。

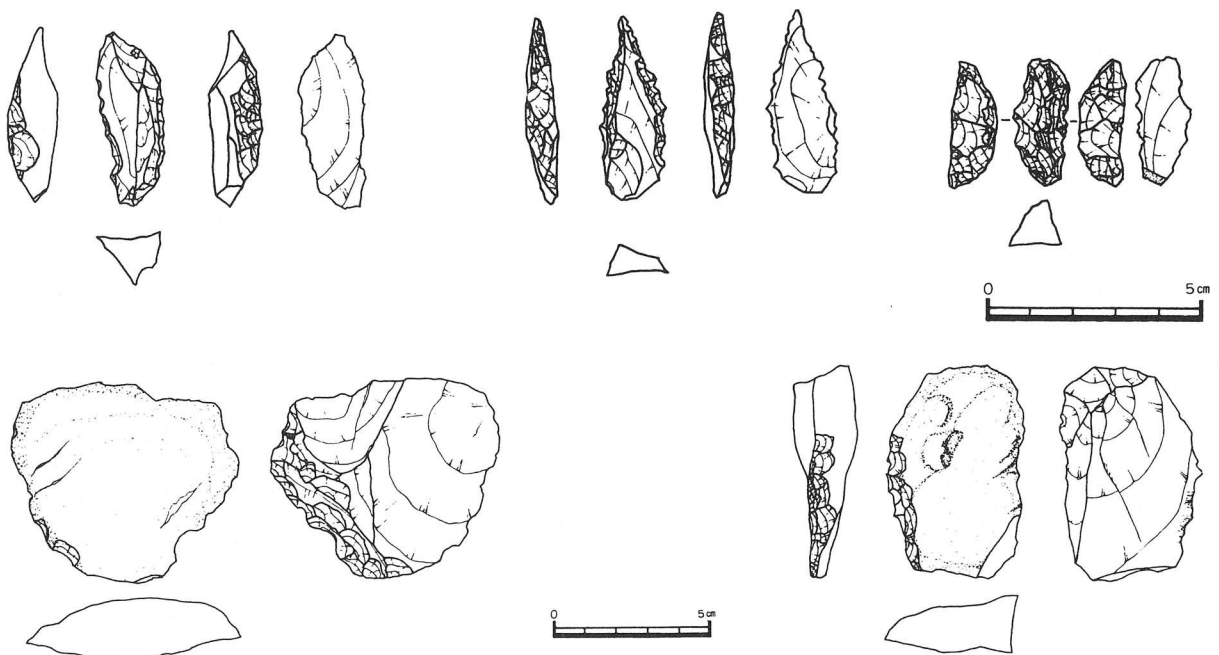
宮崎平野部では1984年に田野町芳ヶ迫第1遺跡(面高1986)、札ノ元遺跡(寺師1986)、1989年に宮崎市金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡(野間・高松・宮下・橘1990)、1993年に垂水第1遺跡(日高1994)が調査された。

芳ヶ迫第1遺跡、札ノ元遺跡はともに標高約600mの荒平山、前平山の北西裾に広がる前平地区遺跡群に属し、近接する位置関係にある。芳ヶ迫第1遺跡ではATを含む礫層直上から集石遺構2基が検出され、集石遺構間の径5mの範囲からナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、彫器、使用痕のある剥片等が出土している。札ノ元遺跡では第Ⅸ層のAT層の上層第Ⅷ層を挟んで第Ⅶ層から旧石器時代の遺構遺物が出土し、集石遺構1基を中心に径3mの範囲から凝灰質泥岩製の石核1点、使用痕のある剥片2点、剥片94点、流紋岩製石核1点、ナイフ形石器1点、剥片27点が出土している。

金剛寺原第1遺跡、金剛寺原第2遺跡、垂水第1遺跡は同じ台地上にあり近接している。金剛寺原第1遺跡では層序は良好とは言えないもののATのブロックが部分的に認められる層の直上第3層から焼石の集石ブロックに伴って石器群が出土している。石器はナイフ形石器4点、スクレイパー33点、石核9点、剥片166点など233点が出土し、石材は流紋岩が大勢を占めている。特にスクレイパーは数量とともに器種も多く、中でもエンドスクレイパーが発達している(第204図)。金剛寺原第2遺跡は第1遺跡よりも丘陵端部に位置し、第5層のAT層の上位に1層を挟んで第3層から3基の集石遺構とともに石器群が出土している。石器は200点あまり出土しており、ナイフ形石器7点、スクレイパー7点、二次加工剥片26点、使用痕剥片30点、角錐状石器1点等である。一側縁加工のナイフ形石器の中に横長剥片を素材に用いたものがあること、同じく横長剥片を素材にした角錐状石器があること、金剛寺原第1遺跡にみられたエンドスクレイパーがないことがこの遺跡の特徴としてあげられ



第204図 金剛寺原第1遺跡出土石器（野間・高松1990）



第205図 金剛寺原第2遺跡出土石器（宮下1990）

る(第205図)。金剛寺原遺跡の報告書において橘氏は「少なくとも東九州南部の宮崎県においては、A T直後の時期に、剥片尖頭器、角錐状石器それに定形的な横剥ぎ剥片などを石器組成に含まないナイフ形石器文化の存在を示唆していると言えよう。結局、金剛寺原第1遺跡は、先に挙げた宮崎県内の諸遺跡の中では、最も古い時期が与えられるであろう。」とまとめている(橘1990)。垂水第1遺跡ではA Tは確認できなかったが、A T上位とみられる第V b層、第VI層から旧石器時代の遺構遺物が出土している(日高1994)。遺構は焼礫からなる集石遺構7基と陥し穴2基で、陥し穴はともにV b層で検出され、楕円形及び長楕円形を呈している。いずれも底面に杭穴は確認できなかった。石器は777点が出土し、ナイフ形石器40点、剥片尖頭器8点、角錐状石器15点、スクレイパー23点、石錐4点、二次加工剥片19点、細石刃1点などである(第206図)。

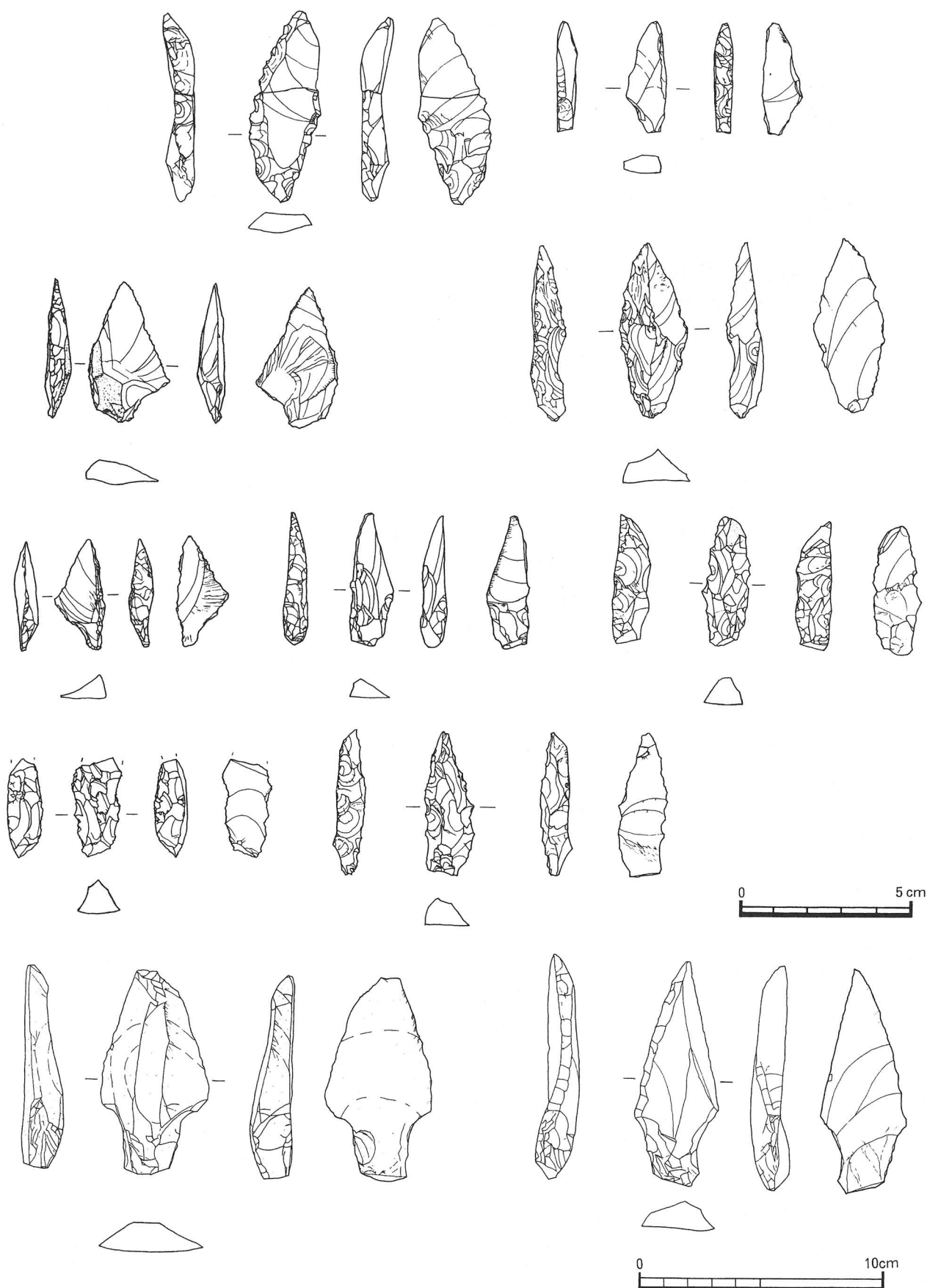
県央部ではこのほかに高鍋町持田中尾遺跡、妻道南遺跡、佐土原町南学原第1・第2遺跡、田野町長藪遺跡等から旧石器の出土がある。

県南部では1992年都城盆地では初めての旧石器時代の遺跡、山田町池増遺跡の発掘調査が行われた。土取りによって3 m近くもの御池ボラ層が削平されていたことも幸いし、通常では到達困難な旧石器層まで調査することができたものである。旧石器では縄文早期層の下層から複数のタイプの石核と細石核、細石刃、礫器、剥片、チップ等約1200点が出土している(第207図)。特に、50点以上の豊富な細石核は船野型、畦原型、野岳型やそれに類似するものがあり、注目されている(金丸・永友1997)。県南部ではA T層下位の遺跡は確認されていないが、A T層上位からは池増遺跡のほか野尻町新村遺跡、高山遺跡、東城原第1遺跡、えびの市妙見遺跡、串間市留ヶ宇戸遺跡、後藤野遺跡等で旧石器が出土している。

第Ⅱ期から旧石器時代の調査が本格的に行われるようになったとはいえ、この時期までは縄文時代以降の調査例に比べ極端に少ない。それは発掘調査の過程で旧石器時代の遺物が出土しても遺物量の僅少さや遺構確認の困難さ等からA T層上位までのかつ限られた範囲内での調査にならざるを得なかったことにも因っている。

宮崎県では置県百年を記念して1984年から宮崎県史編さん事業が計画された。考古関係ではこれまでの研究成果が『資料編考古1』(1989)『資料編考古2』(1993)『通史編原始・古代1』(1997)の3巻に纏められている。旧石器関係では『資料編考古1』に概説とともに出羽洞穴、赤木遺跡、岩土原遺跡、船野遺跡、堂地西遺跡の主な5遺跡について遺跡解説を行っている。縄文時代の63遺跡に比し圧倒的に少ないことが理解できよう。『通史編原始・古代1』では「旧石器文化の成立と県内の文化の幕開け」として通史的に述べられている。

また、1986年には九州旧石器文化研究会による第10回研究会が「九州の細石器文化研究」をテーマに宮崎市で開催された。



第206図 垂水第1遺跡出土石器 (日高1994)



第207図 池増遺跡出土石核（金丸・永友1997）

4 第Ⅲ期；後牟田遺跡・東九州自動車道遺跡群以後（1990年代後半～）

第Ⅲ期で特筆されるのは川南町後牟田遺跡の調査である。調査は1993年から川南町教育委員会によって行われたが、第1文化層の縄文時代早期文化層を初めとして第2文化層から第10文化層まで旧石器時代の文化層が続いていることが判明し、調査中から全国的な注目を集めた。遺跡は川南町の尽力により保存されることになり、遺跡の重要性から別府大学教授橘昌信氏を団長に東京大学助教授佐藤宏之氏を副団長として後牟田遺跡調査団が結成され、1999・2000年に学術調査が実施された。その結果、古くは約3.5万年前の褐色ローム層上部から焼礫群や石皿、磨石などが出土し、最古とされていた鹿児島県中種子町立切遺跡を数千年遡る生活痕跡が確認された。

一方、東九州自動車道建設に伴う調査は1995年から開始された。先ず、西都清武間27.5 kmについて1995年から1999年にかけて33箇所が調査された。現在、引き続き都農西都間24.7 kmの発掘調査が続けられている。旧石器関係は西都清武間では清武町永ノ原、下星野、杉木原、上の原第1、白ヶ野、国富町塚原、木脇、松元、佐土原町上ノ迫、長藪原、下屋敷、上ノ原、西ヶ迫、西都市別府原の14遺跡である。このうちAT下層まで遺跡が確認されたのは別府原遺跡、上ノ原遺跡の2遺跡である。間もなく全ての調査報告書が刊行される。都農西都間は調査が鋭意進められているが、殆どの遺跡から旧石器が出土しており、成果が期待されている。

そのほか、北方町慈眼寺霊園遺跡、西郷村キション原遺跡、高岡町永迫第2遺跡等が調査されている。

また、1999年同志社大学は出羽洞穴学術発掘調査団を組織し、既出土石器群の性格究明と所属時期の決定、未知の文化層の探索、各種分析用土壌サンプルの採取などを目的に出羽洞穴遺跡の第3次学術調査を行っている（松藤・森川ほか2000）。2000年も継続して調査が行われた。

研究会関係では、1995年には宮崎考古学会と鹿児島県考古学会の合同研究会で「南九州の旧石器から縄文へ」をテーマに移行期の石器群の変遷、後牟田遺跡の調査報告などをもとにシンポジウムが行われた。

1997年に開催された第22回九州旧石器文化研究会では重山郁子氏が宮崎県における細石器文化の編年について試案を提示している（重山1997）。資料となる細石器が少ない段階での試案であったが、興味ある内容であり、更なる資料の蓄積を重ねて再検討し補強する必要があるだろう。

また、1998年には宮崎市においては2回目になる九州旧石器文化研究会が開催された。第23回研究会でテーマは「九州島における細石器文化の石器と技術」である。会では白石浩之氏の細石器文化の原料・技術・分布の問題に関する基調報告の後、細石刃及び細石刃核の製作技術・剥片石器の剥離技術・石器組成・遺構とブロック等について討論が行われた。予稿編に日高広人氏の九州における細石器文化期の遺構についての資料集成がある（日高1998）が、礫群についての詳細なデータの不足をあげている。調査報告書には平面分布図以外の属性データの提示例が少なく詳細が不明な点もあり、規

模や形態、構成礫数、構成礫のサイズ、重量、石質、破損率、赤化率、付着物、接合状況など共有できるデータの蓄積と自然科学的分析の活用を提起している。礫群は旧石器時代では最も高い頻度で出土している遺構であるが故に調査を進める上で基礎的作業として確立しておかなければならない。

新世紀を迎える時期に二つの研究発表があった。松本茂氏は南九州地域の細石刃石器群の概略（組成・使用石材・編年）と列島での位置づけについて論じた（松本2000）。藤木聡氏は宮崎県域の旧石器時代の状況を四期に分け、それぞれの河川流域ごとに時期別の調査状況を述べ、編年論および文化系統・生業論、遺跡構造・形成論、石器石材論、石器技術論、前・中期旧石器問題の各論について現状と課題をまとめた（藤木2001）。ともに最近までの調査成果をもとにしながら宮崎県域の今後の研究の方向性を示したものといえる。

終わりに

宮崎県域における旧石器文化研究は他の時代に比較し停滞気味であった。それは遺跡そのものの数が少ないこともあろうが、発掘調査上の制約等による調査例の少なさ、県内の旧石器文化の研究者不足等諸々の要因が考えられる。しかし、東九州自動車道遺跡群の発掘調査以来、予定路線が宮崎平野部から県北部にかけての洪積台地を縦走することもあり、AT層上位はもとよりAT層下位まで徹底して調査することが当たり前のこととなりつつある。これには1970年代初頭に行われた船野遺跡の発掘調査、大野氏の児湯郡下における旧石器採集、そして、特に1993年以降に行われた後牟田遺跡の発掘調査などの県央部における成果に基づく認識の深化に負うところが大きい。今後、全国的な調査の進展と相俟って県内全域に敷衍されることであろう。

次に、旧石器時代遺跡の希薄とされる、特にAT層下の遺跡が未確認の県南部地域は御池ボラ及びAT、シラスなど地域によっては数メートル以上にも及ぶ堆積のために他の地域で行う発掘調査に比べかなり困難な状況を余儀なくされている。しかし、最近のこの地域の発掘調査によってAT降灰後の旧石器が少ないながらも検出されている。AT層下の遺跡も当然考えられることから調査に際しては万難を排して果敢に立ち向かう気概も必要であろう。

宮崎県域の旧石器時代の様相も次第に明らかになりつつあるが、未だ資料蓄積の時代が続いている。今後、旧石器文化の解明に向けて課題を明確にしながら発掘調査を進展させなければならない。さらに、宮崎県域は前・中期旧石器時代の遺跡も追求できる可能性を秘めている。幸い、1998年宮崎旧石器文化談話会も発足した。会員の活発な研究活動も期待されている。

本稿を草するに当たり、永友良典・谷口武範・小野信彦・重山郁子・日高広人・藤木聡・松本茂・近藤協の各氏にはいろいろとお世話になった。記して感謝申し上げたい。

引用参考文献

- 小野信彦1989「宮崎県の旧石器時代研究史」『宮崎考古』石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻 宮崎考古学会
- 永友良典1997「本県の旧石器研究小史」『宮崎県史』通史篇原始・古代1 宮崎県
- 藤森栄一1978「九州廻記」『藤森栄一全集1』
- 石川恒太郎1968『宮崎県の考古学』吉川弘文館 20頁註
- 鈴木重治1985『日本の古代遺跡 25 宮崎』保育社
- 鎌木義昌・間壁忠彦1965「九州地方の先土器時代」『日本の考古学』I 河出書房
- 鈴木重治1989「出羽洞穴」『宮崎県史』資料編考古1 宮崎県 94～100頁
- 鈴木重治1973「宮崎県岩土原遺跡の調査－土器伴出細石器文化の一例－」『石器時代』第10号
- 鈴木重治1989「岩土原遺跡」『宮崎県史』資料編考古1 宮崎県 111～115頁
- 橘 昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』三 別府大学考古学研究会
- 茂山 護・大野寅夫1977「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第3号 宮崎考古学会
- 茂山 護1980「畦原型細石核－大野寅夫採集石器集成（1）－」『宮崎考古』第6号 宮崎考古学会
- 岩永哲夫1991「井野遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第34集 宮崎県教育委員会
- 永友良典1985「堂地西遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第二集 宮崎県教育委員会
- 永友良典1987「赤木遺跡発掘調査概要報告」『延岡市文化財調査報告書』Ⅲ 延岡市教育委員会
- 山田聡・高松永治1990「片田遺跡（概報）」『延岡市文化財調査報告書』第5集 延岡市教育委員会
- 谷口武範1992「上南方地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第8集 延岡市教育委員会
- 谷口武範1995『矢野原遺跡』宮崎県教育委員会
- 緒方博文1994『百町原地区遺跡』日向市教育委員会
- 永友良典1989「各県の動向宮崎県」『九州旧石器』創刊号 九州旧石器文化研究会
- 面高哲郎1986「芳ヶ迫第1遺跡の調査」『田野町文化財調査報告書』第3集 田野町教育委員会
- 寺師雄二1986「札ノ元遺跡の調査」『田野町文化財調査報告書』第3集 田野町教育委員会
- 野間重孝・高松永治・宮下貴浩・橘昌信1990『金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡』宮崎市教育委員会
- 日高広人1994『垂水第1遺跡』宮崎市教育委員会
- 金丸武司・永友良典1997「山田町池増遺跡出土の細石核」『宮崎考古』第15号 宮崎考古学会
- 松藤和人・森川実ほか2000『出羽洞穴遺跡－第3次学術調査の概要－』同志社大学考古学資料室・出羽洞穴学術発掘調査団
- 宮崎考古学会・鹿児島県考古学会1995『南九州の旧石器から縄文へ』
- 重山郁子1997「宮崎県における細石器文化の編年への試案」『九州の細石器文化－細石器文化の開始と編年研究－』九州旧石器文化研究会
- 日高広人1998「九州における細石器文化期の遺構について」『九州の細石器文化－九州島における細石器文化の石器と技術－』九州旧石器文化研究会
- 松本茂2000「南九州の細石刃石器群」『第17回中・四国旧石器文化談話会発表要旨』
- 藤木聡2001「宮崎県域における旧石器時代研究の現状と課題」宮崎考古学会例会発表資料